

IBM WebSphere Business Integration



WebSphere Business Integration Adapters インストール・ガイド

バージョン 2.3.1

IBM WebSphere Business Integration



WebSphere Business Integration Adapters インストール・ガイド

バージョン 2.3.1

お願い

本書および本書で紹介する製品をご使用になる前に、25 ページの『特記事項』に記載されている情報をお読みください。

本書は、IBM WebSphere Business Integration Adapters 2.3.1、および新しい版で明記されていない限り、以降のすべてのリリースおよびモディフィケーションに適用されます。

本マニュアルに関するご意見やご感想は、次の URL からお送りください。今後の参考にさせていただきます。

<http://www.ibm.com/jp/manuals/main/mail.html>

なお、日本 IBM 発行のマニュアルはインターネット経由でもご購入いただけます。詳しくは

<http://www.ibm.com/jp/manuals/> の「ご注文について」をご覧ください。

(URL は、変更になる場合があります)

お客様の環境によっては、資料中の円記号がバックスラッシュと表示されたり、バックスラッシュが円記号と表示されたりする場合があります。

原 典： IBM WebSphere Business Integration
Installation Guide for WebSphere Business Integration Adapters
Version 2.3.1

発 行： 日本アイ・ピー・エム株式会社

担 当： ナショナル・ランゲージ・サポート

第1刷 2003.8

この文書では、平成明朝体™W3、平成明朝体™W9、平成角ゴシック体™W3、平成角ゴシック体™W5、および平成角ゴシック体™W7を使用しています。この(書体*)は、(財)日本規格協会と使用契約を締結し使用しているものです。フォントとして無断複製することは禁止されています。

注* 平成明朝体™W3、平成明朝体™W9、平成角ゴシック体™W3、
平成角ゴシック体™W5、平成角ゴシック体™W7

© Copyright International Business Machines Corporation 2003. All rights reserved.

© Copyright IBM Japan 2003

目次

本書について	v
対象読者	v
関連文書	v
書体の規則	v
本リリースの新機能	vii
リリース 2.3.1 の新機能	vii
WebSphere Business Integration Adapters のインストール	1
WebSphere Business Integration Adapters のインストール	1
特記事項	25
プログラミング・インターフェース情報	26
商標	27

本書について

IBM^(R) WebSphere^(R) Business Integration Adapter は、主要な e-business テクノロジーやエンタープライズ・アプリケーション向けに統合コネクティビティを提供します。このシステムには、ビジネス・プロセス統合用のコンポーネントのカスタマイズ、作成、管理を行うためのツールとテンプレートが組み込まれています。

本書では、Windows 環境、Solaris 環境、AIX 環境、および HP-UX 環境で IBM WebSphere Business Integration Adapters をインストールする方法を説明します。

注: UNIX コンピューターにアダプターをインストールする場合でも、ツールを実行するために Windows コンピューターが 1 台必要です。

対象読者

本書は、WebSphere Business Integration Adapters を計画、インストール、配置、管理するコンサルタント、開発者、およびシステム管理者を対象としています。

関連文書

この製品に関して入手できる資料の完全なセットでは、すべての WebSphere Business Integration Adapter インストールに共通の機能とコンポーネントについて説明します。また、特定のコンポーネントに関する参照資料も含まれます。

以下のサイトから資料をインストールするか、オンラインで直接閲覧することができます。

- WebSphere MQ Integrator Broker または WebSphere Application Server を統合ブローカーとして使用している場合:
<http://www.ibm.com/software/websphere/integration/wbiadapters/infocenter>
- WebSphere InterChange Server を統合ブローカーとして使用している場合:
<http://www.ibm.com/websphere/integration/wicsserver/infocenter>

上記のサイトには資料のダウンロード、インストール、および表示に関する簡単な説明が記載されています。

書体の規則

本書では、以下のような規則を使用しています。

Courier フォント	コマンド名、ファイル名、入力情報、システムが画面に出力した情報など、記述されたとおりの値を示します。
イタリック、イタリック 青い文字	初出語、変数名、または相互参照を示します。 オンラインで表示したときのみ見られる青のアウトラインは、相互参照用のハイパーリンクです。アウトラインの内側をクリックすると、参照先オブジェクトにジャンプします。

{ }	構文の記述行の場合、中括弧 {} で囲まれた部分は、選択対象のオプションです。1 つのオプションのみを選択する必要があります。
	構文の記述行の場合、パイプで区切られた部分は、選択対象のオプションです。1 つのオプションだけを選択する必要があります。
[]	構文の記述行の場合、大括弧 [] で囲まれた部分は、オプションのパラメーターです。
...	構文の記述行の場合、省略符号 ... は直前のパラメーターが繰り返されることを示します。例えば、option[,...] は、複数のオプションをコンマで区切って指定できることを意味します。
< >	1 つの名前の個々のエレメントを互いに区別するために、不等号括弧によって個々のエレメントが囲まれます。例えば、<server_name><connector_name>tmp.log のように使用します。
/, ¥	本書では、ディレクトリー・パスの規則として円記号 (¥) を使用します。UNIX システムの場合には、円記号をスラッシュ (/) に置き換えてください。すべての製品パス名は、Ariba Buyer のコネクタがインストールされているディレクトリーを基準とした相対パス名です。
%text% および \$text	パーセント (%) 符号で囲まれたテキストは、Windows の text システム変数またはユーザー変数の値を示します。UNIX 環境での同等の表記は \$text であり、UNIX の text 環境変数の値を示します。
<i>ProductDir</i>	製品のインストール先ディレクトリーを表します。

本リリースの新機能

リリース 2.3.1 の新機能

本書は、WBIA バージョン 2.3.1 で新規に作成されました。

WebSphere Business Integration Adapters のインストール

この章では、WebSphere Business Integration Adapters のインストール方法を説明します。

WBIA を前のバージョンからアップグレードする場合は、ご使用のブローカーのインストール・ガイドまたはインプリメンテーション・ガイドの説明に従って、まず統合ブローカー・システムをバックアップしてください。

本章の内容は、次のとおりです。

- 『WebSphere Business Integration Adapters のインストール』
- 21 ページの『WebSphere Business Integration Adapters のアンインストール』

WebSphere Business Integration Adapters のインストール

このセクションでは、WebSphere Business Integration Adapters (WBIA) のインストール方法について説明します。

WBIA 製品をインストールするには、プラットフォーム固有のインストーラー実行可能ファイルを実行します。表 1 に、各オペレーティング・システムのインストーラー実行可能ファイルをリストします。インストーラー実行可能ファイルは、製品 CD の WebSphereBI ディレクトリーにあります。

表 1. プラットフォーム固有の WBIA インストーラー実行可能ファイル

オペレーティング・システム	WBIA インストーラー実行可能ファイル
Windows	setupwin32.exe
AIX	setupAIX.bin
Solaris	setupsolarisSparc.bin
HP-UX	setupHP.bin

インストーラー実行可能ファイルを使用して、次のようにインストールを実行できます。

- 2 ページの『WBIA グラフィカル・インストーラーの起動』の説明に従いグラフィカル・インストーラーを始動し、3 ページの『WBIA グラフィカル・インストーラーの使用』の説明に従いインストール・ウィザードに従って選択します。
- 12 ページの『サイレント・インストールの実行』の説明に従いサイレント・インストールを実行します。

注: これらの手順では、製品 CD からのインストールを前提としています。ソフトウェアをパスポート・アドバンテージから入手する場合は、ソフトウェアをダウンロードしてあることを確認してください。ダウンロード方法については、パスポート・アドバンテージ情報を参照してください。

注: アダプターをインストールして InterChange Server と通信する場合は、最初にブローカーをインストールする必要があります。ブローカーのインストール方法については、該当するプラットフォーム用の InterChange Server インストール・ガイドを参照してください。

重要: アダプターをインストールする前に、WebSphere Business Integration システム管理者としてログインします。UNIX コンピューターにインストールする場合、作成されるフォルダーやファイルの許可が、インストールを実行するユーザー・アカウントの権限に基づいて設定されます。

重要: WBIA を root としてインストールしないでください。root としてインストールすると Object Data Manager (ODM) に追加されるエントリが原因で、SMIT を使用して他のアプリケーションをアンインストールすることができなくなるので、WBIA を root としてインストールしないでください。

WBIA グラフィカル・インストーラーの起動

WBIA グラフィカル・インストーラーでは、ウィザードが表示され、ユーザーは WBIA 製品のインストールに関して選択を行うことができます。インストーラーは Java ベースなのでプラットフォームに依存しませんが、インストーラーの起動方法はプラットフォームによって異なります。このセクションでは、Windows および UNIX コンピューターの場合の方法について説明します。

Windows 環境でのインストーラーの起動

Windows 環境でインストーラーを起動するには、製品 CD の WebSphereBI ディレクトリーにナビゲートし、setupwin32.exe を実行します。

UNIX 環境でのインストーラーの起動

UNIX 環境では、WBIA インストーラーは、WebSphereBI ディレクトリーにあるプラットフォーム固有の .bin ファイルを使用して起動します。1 ページの表 1 に、プラットフォームごとの .bin ファイルの名前が示されています。

UNIX コンピューターでの作業方法に応じて以下のいずれかのステップを実行し、インストーラーを起動します。

- 『UNIX コンピューター上で CDE を実行している場合』
- 3 ページの『X エミュレーション・ソフトウェアを使用して UNIX コンピューターに接続している場合』

UNIX コンピューター上で CDE を実行している場合: UNIX コンピューター上で Common Desktop Environment (CDE) を実行して作業している場合、製品 CD の WebSphereBI ディレクトリーにナビゲートし、オペレーティング・システム固有の .bin ファイルをダブルクリックします。

また、製品 CD の WebSphereBI ディレクトリーにナビゲートし、コマンド行で .bin ファイルを実行することもできます。以下に、Solaris コンピューター上での実行例を示します。

```
# ./setupsolarisSparc.bin
```

X エミュレーション・ソフトウェアを使用して UNIX コンピューターに接続している場合: Windows コンピューターを使用して、X エミュレーション・ソフトウェアを介して UNIX コンピューターに接続している場合、以下の手順を実行してインストーラーを起動します。

1. UNIX コンピューターへの接続に使用している Windows コンピューターの IP アドレスを判別します。

Windows コマンド行インターフェースで `ipconfig` コマンドを実行すると、Windows コンピューターの IP アドレスが表示されます。

2. UNIX コンピューターの `DISPLAY` 環境変数を、ステップ 1 で確認した IP アドレスに設定します。

IP アドレスの後には、コロンと、Windows クライアント・コンピューターのモニターまたはディスプレイの ID を設定する必要があります。Windows クライアント・コンピューターに単一のモニターしかない場合は、ディスプレイ値は `0.0` になります。

以下に示すのは、IP アドレスが `9.26.244.30` である Windows コンピューターで、単一のモニターを設定された `DISPLAY` 環境変数の例です。

```
DISPLAY=9.26.244.30:0.0
```

3. 次のコマンドを実行して、`DISPLAY` 環境変数をエクスポートします。

```
export DISPLAY
```

4. Windows コンピューター上で X エミュレーションを始動し、UNIX コンピューターに接続します。

5. X エミュレーション・クライアントのコマンド行で、製品 CD の `WebSphereBI` ディレクトリーにナビゲートします。

6. オペレーティング・システム固有の `.bin` ファイルを実行します。例えば、UNIX コンピューターで AIX が稼動している場合、次のコマンドを実行します。

```
# ./setupAIX.bin
```

UNIX コンピューターへの接続に使用している Windows コンピューター上で、グラフィカル・インストーラーが始動します。

WBIA グラフィカル・インストーラーの使用

WBIA インストーラーを実行すると、インストールのタイプを選択するようプロンプトが出された後、インストールが実行されます。

インストールするアダプターを選択すると、そのサポートに必要なランタイム・コンポーネントおよびデータ・ハンドラーが、インストールされるよう自動的に選択されます。ただし、現行バージョンのランタイム・コンポーネントがすでにシステムに存在することがインストーラーによって判別された場合は、インストールされません。

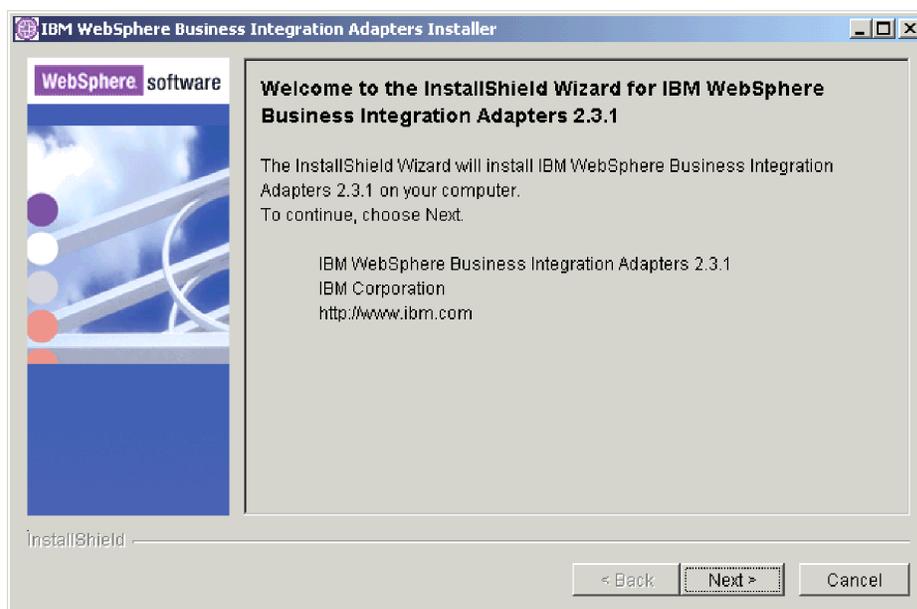
注: ビジネス・インテグレーション・アダプターのインストール中に「キャンセル」をクリックした場合、一部のファイルは新規に作成されたディレクトリーに残ります。ファイルの数は、インストールをキャンセルするまでのプロセスの進行度によって異なります。

インストーラーを進行させるには、以下の手順を実行します。

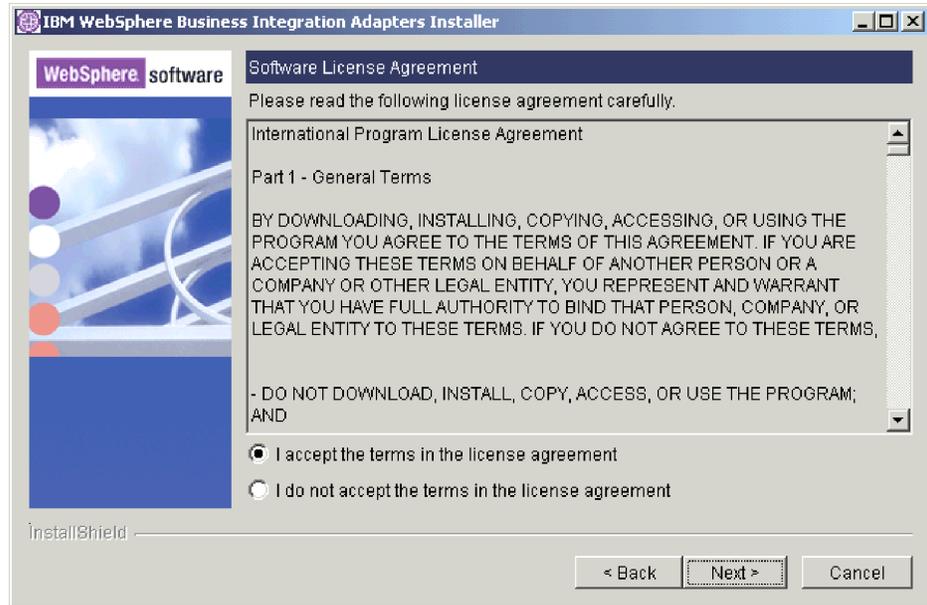
1. 言語選択のプロンプトで、ドロップダウン・メニューから目的の言語を選択し、「OK」をクリックします。



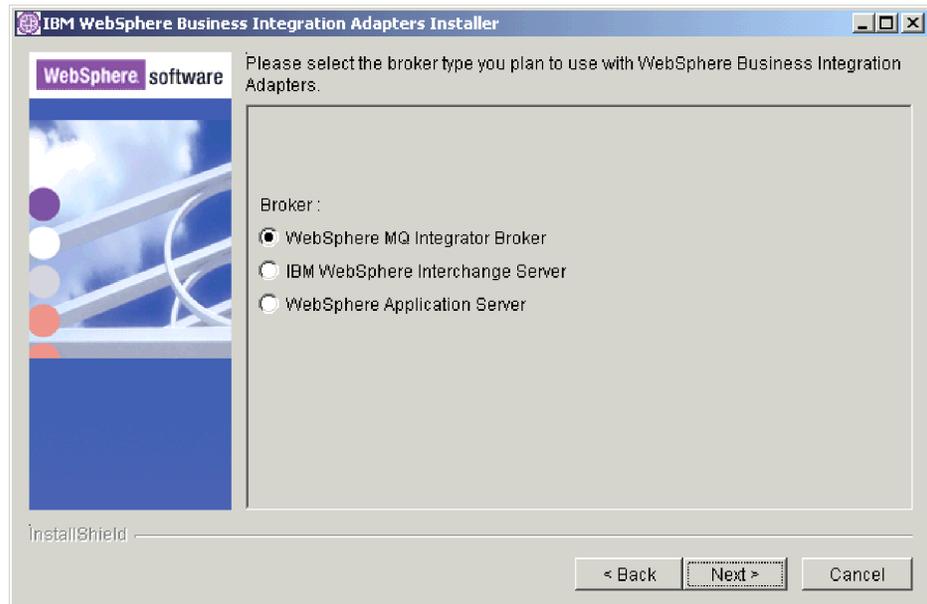
2. 初期画面で「次へ」をクリックします。



3. 「IBM ご使用条件」パネルで、「ご使用条件に同意します (I accept the terms in the license agreement)」をクリックし、「OK」をクリックします。



4. 「ブローカー選択」画面で、アダプターの通信先となる統合ブローカーのタイプのラジオ・ボタンをクリックし、「次へ」をクリックします。



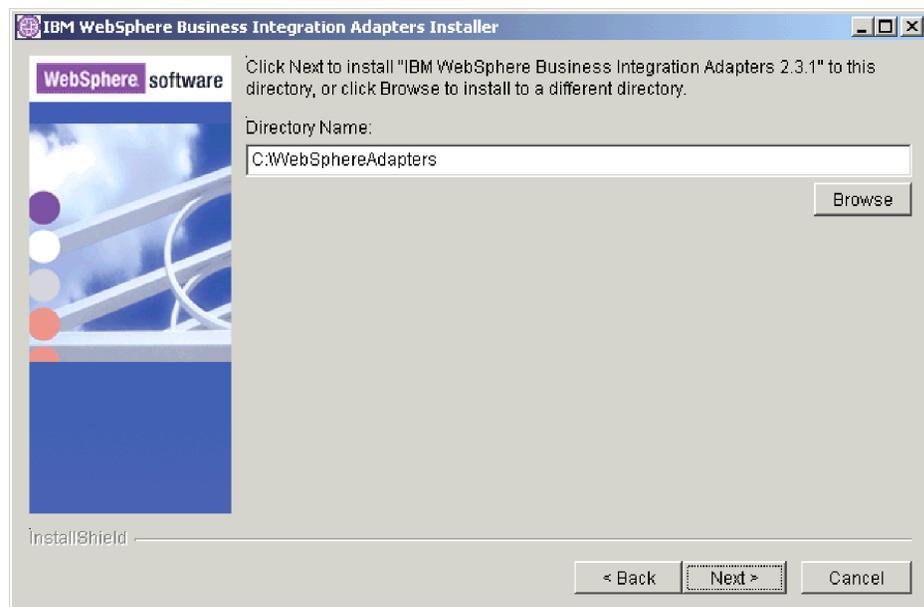
5. 「インストール・ディレクトリ」画面で、アダプターのインストール先ディレクトリの絶対パスを入力するか、「参照」をクリックしてディレクトリを選択するか、あるいはデフォルト・パスを受け入れて、「次へ」をクリックします。

重要: インストール・ディレクトリを指定する際は、パスにスペースを入れないでください。

表 2 に、各種統合ブローカーについて、サポートされる各プラットフォーム上でのアダプターのデフォルトのインストール・ディレクトリーを示します。

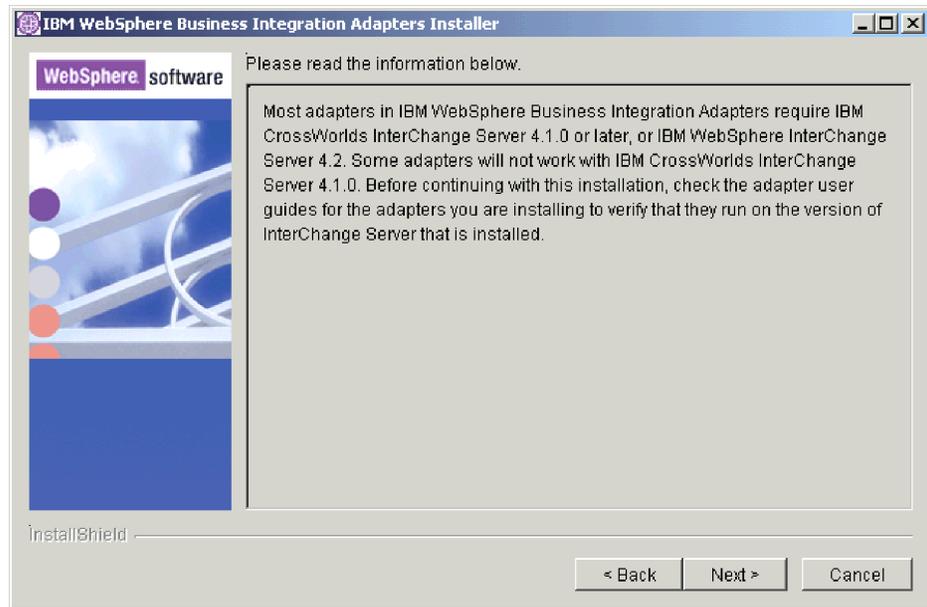
表 2. アダプターのデフォルトのインストール・ディレクトリー

ブローカー・タイプ	デフォルトの Windows ディレクトリー	デフォルトの UNIX ディレクトリー
WebSphere MQ Integrator Broker	C:\WebSphereAdapters	/\$HOME/WebSphereAdapters
WebSphere InterChange Server	C:\IBM\WebSphereICS	/\$HOME/IBM/WebSphereICS
WebSphere Application Server	C:\WebSphereAdapters	/\$HOME/WebSphereAdapters

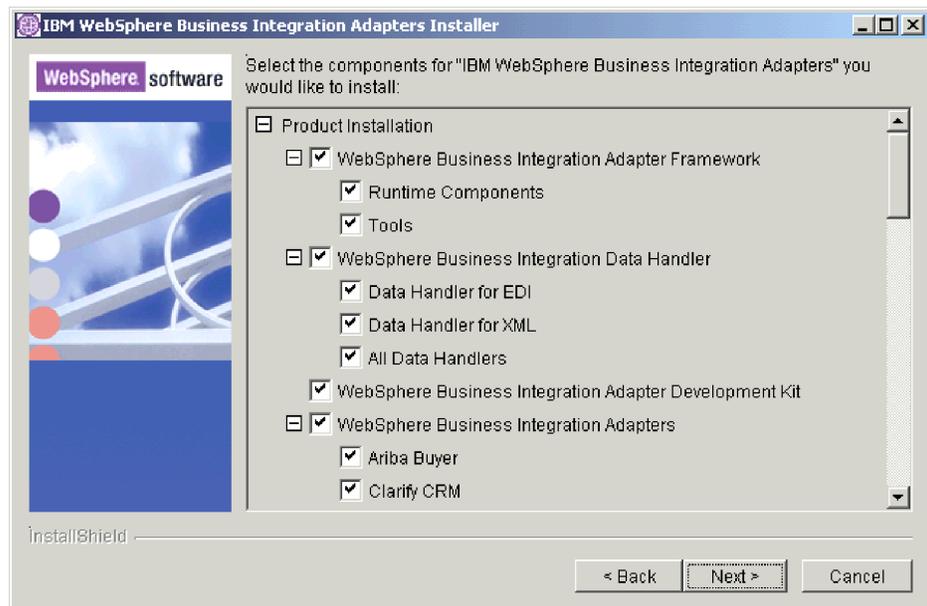


重要: ご使用のブローカーが WebSphere InterChange Server である場合、この画面で WebSphere InterChange Server の製品ディレクトリーを指定する必要があります。アダプターのインストール先とブローカーのインストール先を同じディレクトリーに指定しないと、アダプターを実行できません。

- ステップ 4 で WebSphere InterChange Server をブローカーに選択した場合、ここでインストーラーから情報画面が示されます。情報を読み、「次へ」をクリックします。



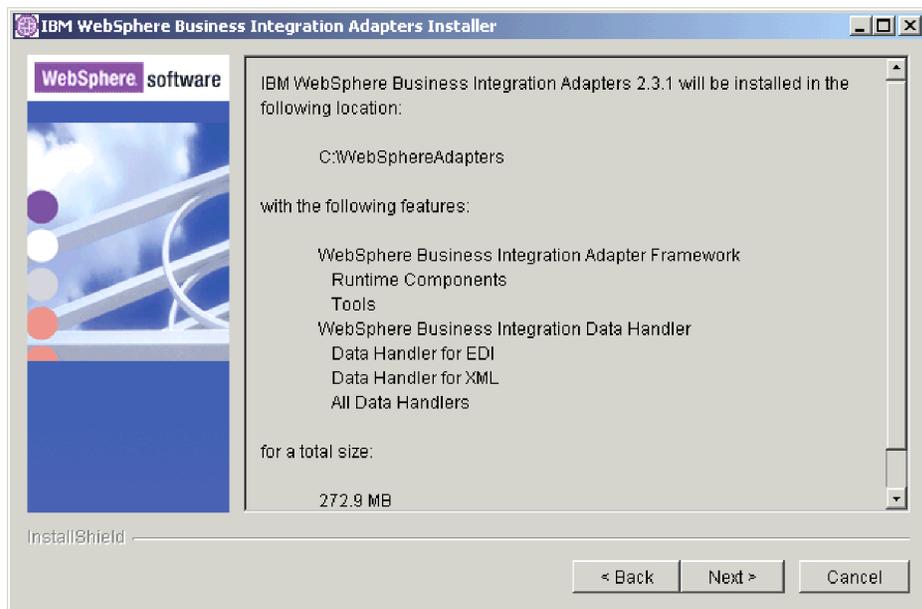
7. 「コンポーネント選択」画面で、インストールするアダプターおよび機能のチェック・ボックスにチェックマークを付け、「次へ」をクリックします。



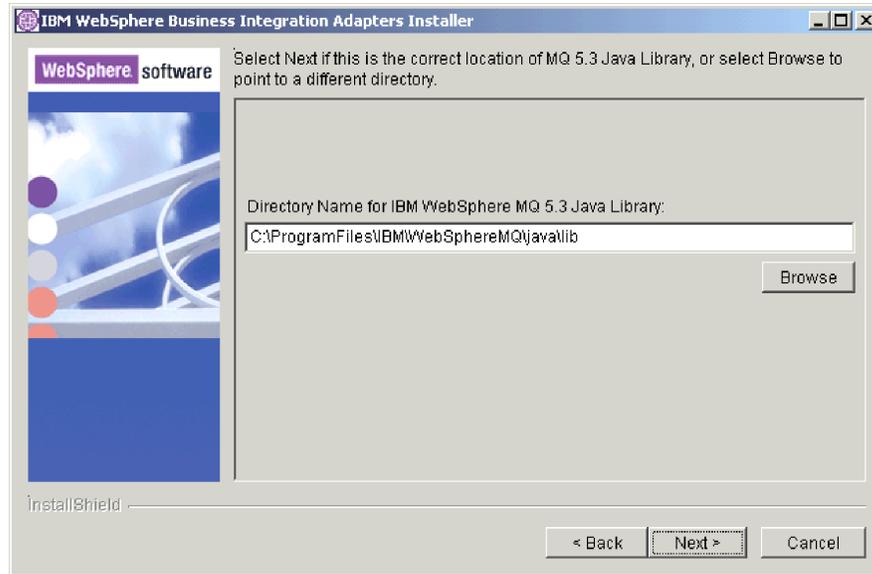
インストールすることを選択できる機能は、ブローカーによって異なります。例えば、ブローカーとして WebSphere MQ Integrator Broker または WebSphere Application Server を選択すると、アダプターのランタイム・コンポーネントおよびツールが選択可能です。しかし、WebSphere InterChange Server を選択すると、これらは選択できません。これは、ツールおよびランタイム・コンポーネントがブローカーのインストールの一環としてインストールされるためです。

インストールすることを選択できる機能は、オペレーティング・システムによっても異なります。例えば、ツールは Windows 環境でのみサポートされるので、インストーラーを Windows コンピューター上で実行する場合にのみ選択可能です。

8. 「要約」画面に、インストールすることを選択された機能、指定された製品ディレクトリー、および必要なディスク・スペースがリストされます。情報を確認してから、「次へ」をクリックします。

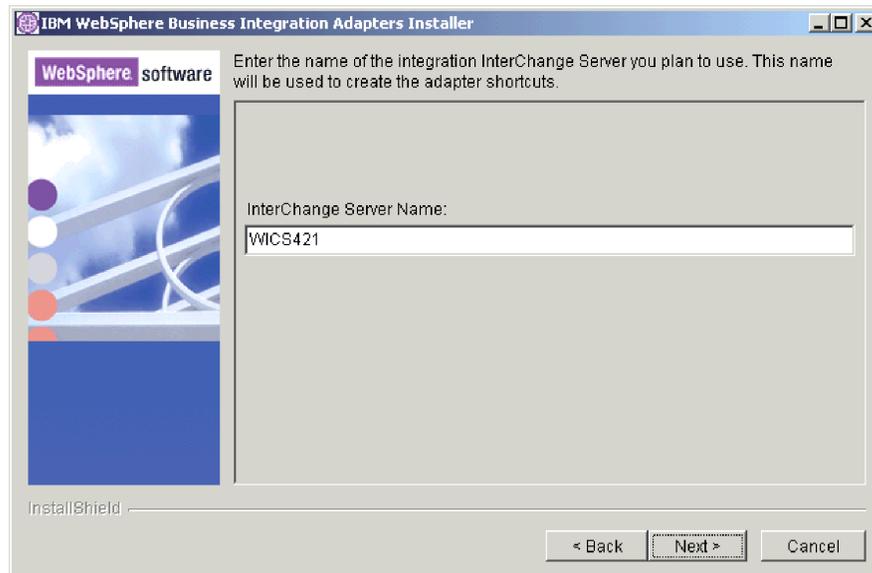


9. ステップ 4 で選択したブローカーに応じて、以下の手順を実行します。
 - ステップ 4 で、ブローカーとして WebSphere MQ Integrator Broker または WebSphere Application Server を選択した場合、インストーラーは「MQ Java ライブラリー・ディレクトリー」画面を表示します。
WebSphere MQ インストール・ディレクトリーの java¥lib ディレクトリーへのディレクトリー・パスを入力するか、「参照」をクリックしてディレクトリーを選択し、「次へ」をクリックします。



- ステップ 4 で、ブローカーとして WebSphere InterChange Server を選択した場合、ここでインストーラーは「InterChange Server 名」画面を表示します。「InterChange Server 名」フィールドに、アダプターの通信先となる InterChange Server インスタンスの名前を入力し、「次へ」をクリックします。

重要: InterChange Server インスタンス名は正確に指定してください。サーバー名には大文字小文字の区別があり、正しく入力しないとコネクタがサーバーと通信できません。



10. 以下に該当する場合、インストーラーは次に「ワークベンチ選択」画面を表示します。この画面では、必要なツールとインストール済みの統合コンポーネントとの連携方法を指定します。

- Windows コンピューター上にインストールしている場合

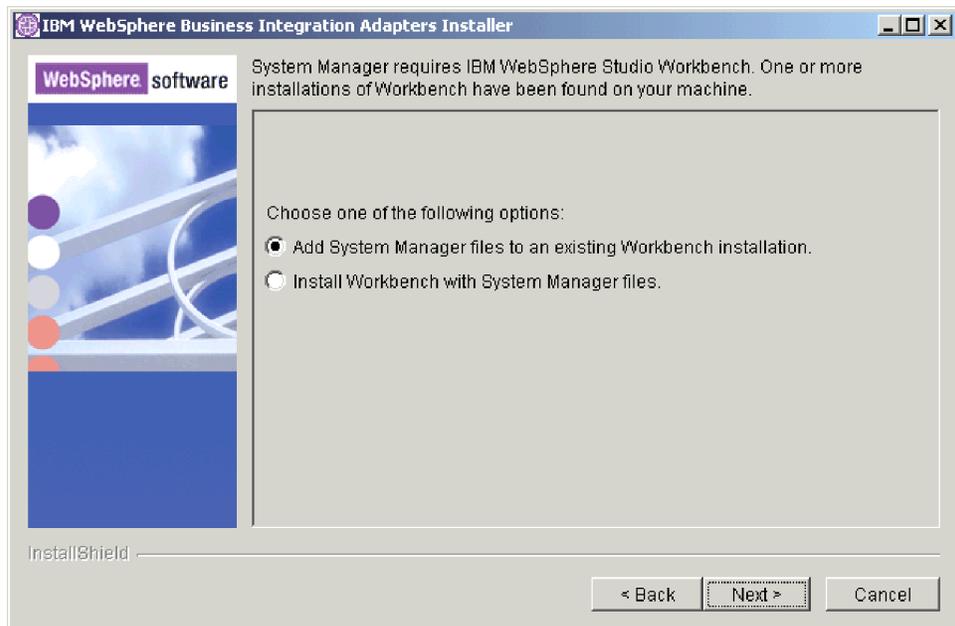
- WebSphere MQ Integrator Broker または WebSphere Application Server を統合ブローカーとして選択した場合
- ツール機能のインストールを選択した場合
- WebSphere Studio Application Developer Integration Edition バージョン 5.0.1 がコンピューターにインストールされている場合

WSADIE 5.0.1 の既存のインストールにプラグインを追加する場合は、「既存の **Workbench** インストールに **System Manager** ファイルを追加する」を選択します。ステップ 11 で説明するように、次のインストーラー画面で、既存の WSADIE 5.0.1 インストールの製品ディレクトリーを指定するよう要求されます。

重要: ワークベンチ製品ディレクトリーのパスにスペースがあると、プラグインは機能しません。既存の WSADIE 5.0.1 インストールのパスにスペースがある場合は、このインストール選択項目を選択しないでください。

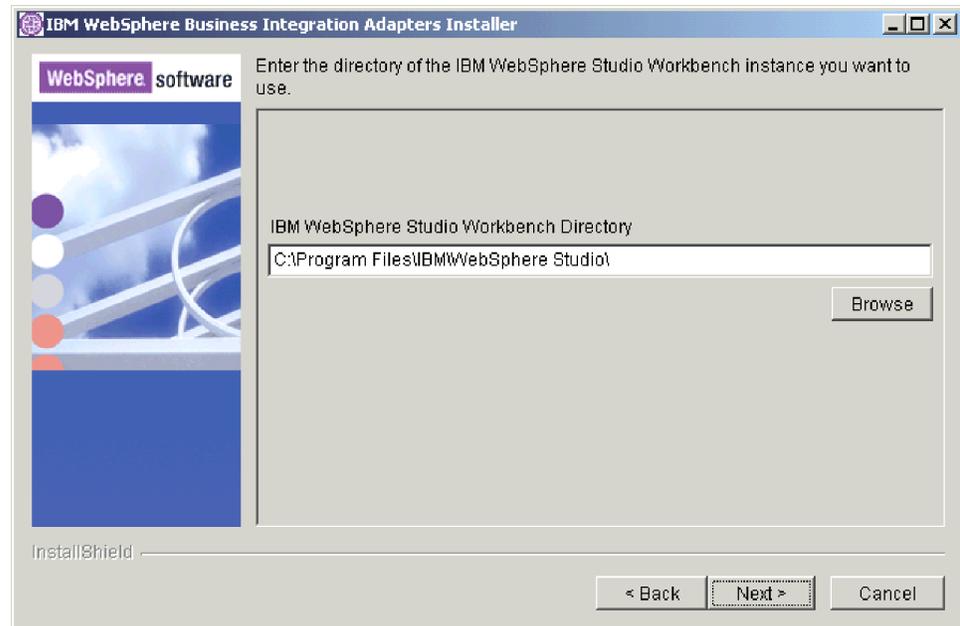
WebSphere Studio Workbench 2.0.3 をインストールし、そのインストールにプラグインを追加する場合は、「**Workbench** を **System Manager** ファイルと共にインストールする」を選択します。これを選択すると、ワークベンチは Tools\WSWB203 というアダプターのインストール・ディレクトリーのサブディレクトリーにインストールされます。

選択したら、「次へ」をクリックします。

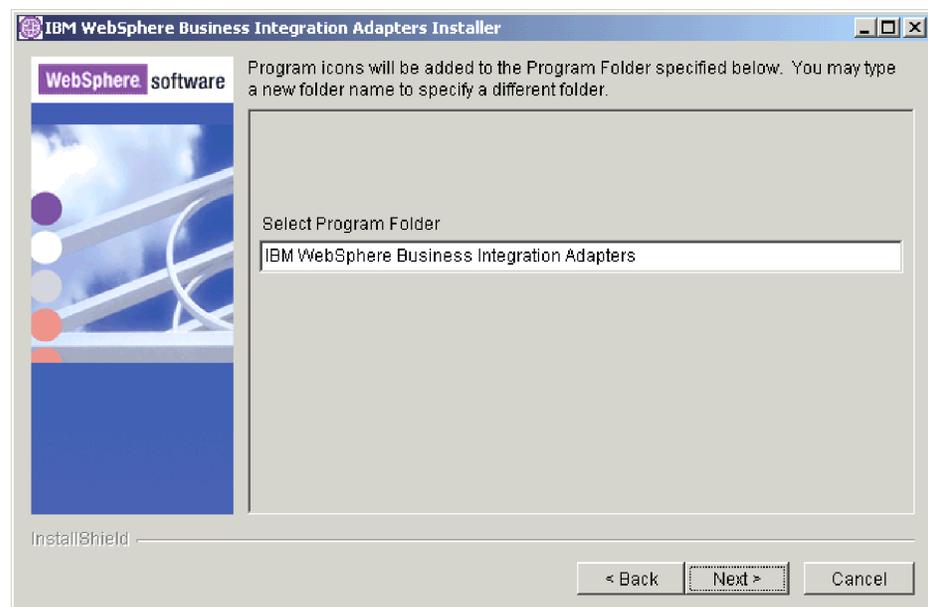


11. ステップ 10 (9 ページ) で説明したように「ワークベンチ選択」画面が表示され、「既存の **Workbench** インストールに **System Manager** ファイルを追加する」を選択した場合、インストーラーは次に「ワークベンチ・インストール・ディレクトリー」画面を表示します。WSADIE 5.0.1 製品ディレクトリーへのパスを入力するか、「参照」をクリックしてディレクトリーを選択し、「次へ」をクリックします。

重要: ワークベンチ製品ディレクトリーのパスにスペースがあると、プラグインは機能しません。既存の WSADIE 5.0.1 インストールのパスにスペースがある場合は、「戻る」をクリックして「**Workbench を System Manager** ファイルと共にインストールする」を選択してください。



- Windows コンピューター上にインストールしている場合、インストーラーは次に「プログラム・フォルダーの選択」画面を表示します。アダプターのショートカットの作成先にするプログラム・グループの名前を入力するか、デフォルトのプログラム・グループを受け入れて、「次へ」をクリックします。



- インストーラーが正常に終了したら、「完了 (Finish)」をクリックします。

サイレント・インストールの実行

WBIA ではサイレント・インストールを実行できます。この場合、インストール・ウィザードの画面ではなく、ファイルでインストール選択項目を指定します。同一のインストールを繰り返し実行する必要がある場合、この方法は特に便利です。

サイレント・インストールを実行するには、まず『インストール応答ファイルの作成』の説明に従いインストール選択項目を指定したファイルを作成し、次に 18 ページの『サイレント・インストールの実行』の説明に従いそのファイルを使用してインストールを実行します。

インストール応答ファイルの作成

サイレント・インストールを実行する場合は、インストール選択項目を指定した応答ファイルを作成します。IBM では、統合ブローカーとプラットフォーム・サポートのさまざまな組み合わせに応じたオプションを含む 4 つの応答ファイルのテンプレートを提供しています。応答ファイルのテンプレートは、製品 CD の WebSphereBI ディレクトリにあります。表 3 に、組み合わせごとの応答ファイルのテンプレートをリストします。

表 3. 応答ファイルのテンプレート

統合ブローカーとプラットフォームの組み合わせ	応答ファイルのテンプレート
Windows 上の WebSphere InterChange Server	settings_WBIAInstaller_ICS.txt
Windows 上の WebSphere Application Server および WebSphere MQ Integrator Broker	settings_WBIAInstaller_WSMQ.txt
UNIX 上の WebSphere InterChange Server	settings_WBIAInstaller_ICS_unix.txt
UNIX 上の WebSphere Application Server および WebSphere MQ Integrator Broker	settings_WBIAInstaller_WSMQ_unix.txt

表 4 に、サイレント・インストール時に使用できるオプションをリストします。オプション値列内の情報にはすべて目を通してください。この列には、特定のオプションをコメント化するべき場合と、ブローカーとプラットフォームの適合性が示してあります。

表 4. サイレント・インストールのオプション

オプション名	オプション値
brokerType.brokerSelection	WebSphere MQ Integrator Broker の場合は 1 に設定します。 WebSphere InterChange Server の場合は 2 に設定します。 WebSphere Application Server の場合は 3 に設定します。

表4. サイレント・インストールのオプション (続き)

オプション名	オプション値
setWINICSDest.value	<p>InterChange Server のインストール先のディレクトリー・パスに設定します。</p> <p>このオプションをコメント化された状態のままにすると、製品は 6 ページの表 2 にリストされたデフォルト・ディレクトリーにインストールされます。</p> <p>このオプションが関連するのは、Windows 上にインストールされている WICS ブローカーの場合のみです。WMQI または WAS ブローカー用にインストールする場合、または UNIX コンピューター上にインストールする場合は、このオプションをコメント化してください。</p>
setWINWMQIDest.value	<p>スペースを含まない有効なディレクトリー・パスに設定して、WBIA 製品のインストール先を指定します。</p> <p>このオプションをコメント化された状態のままにすると、製品は 6 ページの表 2 にリストされたデフォルト・ディレクトリーにインストールされます。</p> <p>このオプションが関連するのは、Windows 上にインストールされている WMQI または WAS ブローカーの場合のみです。WICS ブローカー用にインストールする場合、または UNIX コンピューター上にインストールする場合は、このオプションをコメント化してください。</p>
setUnixICSDest.value	<p>InterChange Server のインストール先のディレクトリー・パスに設定します。</p> <p>このオプションをコメント化された状態のままにすると、製品は 6 ページの表 2 にリストされたデフォルト・ディレクトリーにインストールされます。</p> <p>このオプションが関連するのは、UNIX 上にインストールされている WICS ブローカーの場合のみです。WMQI または WAS ブローカー用にインストールする場合、または Windows コンピューター上にインストールする場合は、このオプションをコメント化してください。</p>

表4. サイレント・インストールのオプション (続き)

オプション名	オプション値
setUnixWMQIDest.value	<p>スペースを含まない有効なディレクトリー・パスに設定して、WBIA 製品のインストール先を指定します。</p> <p>このオプションをコメント化された状態のままにすると、製品は 6 ページの表 2 にリストされたデフォルト・ディレクトリーにインストールされます。</p> <p>このオプションが関連するのは、UNIX 上にインストールされている WMQI または WAS ブローカーの場合のみです。WICS ブローカー用にインストールする場合、または Windows コンピューター上にインストールする場合は、このオプションをコメント化してください。</p>
-P main_product.active	<p>WBIA 製品内のすべてのコンポーネントをインストールする場合は、true に設定します。</p> <p>選択したコンポーネントをインストールする場合は、false に設定します。</p>
-P f_connectors.active	<p>すべてのアダプターをインストールする場合は、true に設定します。</p> <p>指定したアダプターをインストールする場合は、false に設定します。</p>
-P adaptorFrameWork.active	<p>WMQI および WAS ブローカーと連携するアダプターの場合は、true に設定します。</p> <p>WICS ブローカー用にインストールする場合は、このオプションをコメント化します。</p>
-P WindowEnvSetup.active	<p>WMQI および WAS ブローカーと連携するアダプターの場合は、true に設定します。</p> <p>WICS ブローカー用にインストールする場合、または UNIX 上にインストールする場合は、このオプションをコメント化します。</p>
-P support.active	<p>UNIX 上の WMQI および WAS ブローカーと連携するアダプターの場合は、true に設定します。</p> <p>WICS ブローカー用にインストールする場合、または Windows 上の WMQI または WAS ブローカー用にインストールする場合は、このオプションをコメント化します。</p>
-P supportFileRequirement.active	<p>UNIX 上の WMQI および WAS ブローカーと連携するアダプターの場合は、true に設定します。</p> <p>WICS ブローカー用にインストールする場合、または Windows 上の WMQI または WAS ブローカー用にインストールする場合は、このオプションをコメント化します。</p>

表 4. サイレント・インストールのオプション (続き)

オプション名	オプション値
-P frameworkTOOLS.active	<p>ブローカーが WMQI であり、インストール済みコンポーネントとの連携に使用するツールのインストール先プラットフォームが Windows である場合は、true に設定します。</p> <p>WICS または WAS がブローカーである場合、プラットフォームが UNIX である場合、またはツールをインストールしない場合は、false に設定します。</p>
-P adaptorDevelopmentKit.active	<p>ブローカーが WMQI であり、カスタム・アダプターの開発に必要なインターフェースを提供する Adapter 開発キットのインストール先プラットフォームが Windows である場合は、true に設定します。</p> <p>WICS または WAS がブローカーである場合、プラットフォームが UNIX である場合、または Adapter 開発キットをインストールしない場合は、false に設定します。</p>
-P cn<adapvalue>.active	<p>特定のアダプターをインストールする場合、true に設定します。ここで、<i>adapvalue</i> はアダプターを識別する値です。</p> <p>例えば、cnJDBC は Adapter for JDBC を示します。</p> <p>使用可能なアダプターおよびそれらに関連する値については、応答ファイルのテンプレートを参照してください。</p> <p>すべてのブローカーおよびプラットフォームですべてのアダプターが使用できるわけではありません。</p> <p>特定のアダプターが、そのブローカーとプラットフォームの組み合わせで使用可能かどうか判別するには、応答ファイルのテンプレートを参照してください。</p>
-P dataHandler.active	<p>データ・ハンドラーのインストールを可能にする場合は、true に設定します。</p>

表 4. サイレント・インストールのオプション (続き)

オプション名	オプション値
-P <datahandlervalue>.active	<p>特定のデータ・ハンドラーをインストールする場合、true に設定します。ここで、<i>datahandlervalue</i> はデータ・ハンドラーを識別する値です。</p> <p>例えば、<code>xmlDataHandler</code> は XML データ・ハンドラーを示します。</p> <p>使用可能なデータ・ハンドラーおよびそれらに関連する値については、応答ファイルのテンプレートを参照してください。</p> <p>インストーラーは、選択されたアダプターのすべてのデータ・ハンドラー依存関係を評価するので、単にアダプター要件を満たすためにインストールされるデータ・ハンドラーを指定する必要はありません。開発を予定しているアダプターに特定のデータ・ハンドラーを使用する場合に、そのデータ・ハンドラーがデフォルトでインストールされないときは、インストールのためにデータ・ハンドラーを選択する必要があります。</p>
-P AllDataHandlers.active	<p>すべてのデータ・ハンドラーをインストールする場合は、true に設定します。</p> <p>指定したデータ・ハンドラーをインストールする場合は、false に設定します。</p>
-W mqDirectoryUserInput.mqLibraryLocation	<p>WMQI または WAS ブローカー用にインストールする場合、コンピューター上の WebSphere MQ インストール・ディレクトリー内の <code>java\lib</code> ディレクトリーのパスに設定します。</p> <p>WICS ブローカー用にインストールする場合は、このオプションをコメント化します。</p> <p>デフォルト値を使用する場合は、このオプションをコメント化します。Windows プラットフォームでは、インストーラーはデフォルトで Windows レジストリーを検索し、そこで検出された値を使用します。AIX プラットフォームでは、インストーラーはデフォルト値 <code>/usr/mqm/java/lib</code> を使用します。Solaris および HP-UX プラットフォームでは、インストーラーはデフォルト値 <code>/opt/mqm/java/lib</code> を使用します。</p>
-W workbenchChoice.workbenchList	<p>WebSphere Studio Workbench または WebSphere Studio Application Developer Integration Edition の既存インストールにツール・プラグインを追加する場合は、1 に設定します。</p> <p>WebSphere Studio Workbench をインストールする場合は、2 に設定します。</p>

表 4. サイレント・インストールのオプション (続き)

オプション名	オプション値
-W workbenchLocation.workbenchLocDirectory	workbenchChoice.workbenchList オプションの値を 2 に設定することにより WebSphere Studio Workbench のインストールを指定した場合は、このオプションをワークベンチのインストール先ディレクトリー (例えば C:\WebSphereAdapters\Tools) に設定します。
-W inputServer.name	<p>インストールされたアダプターの通信先となる InterChange Server インスタンスの名前に設定します。名前には大文字小文字の区別があるので、正確に指定する必要があります。正しく指定しないとアダプターがサーバーと通信できません。</p> <p>WICS ブローカーと通信するアダプターをインストールする場合は、このオプションがコメント化されていないことと、正しい値が設定されていることを確認する必要があります。WMQI または WAS ブローカー用にインストールする場合は、このオプションをコメント化します。</p>
-W inputShortcuts.folder	<p>WBIA 製品用に作成されたプログラム・グループの名前 (例えば IBM WebSphere Business Integration Adapters) に設定します。</p> <p>このオプションが関連するのは Windows プラットフォームの場合のみです。UNIX 上にインストールする場合は、このオプションをコメント化します。</p>
-W createReposFile.active	<p>インストール用に選択されたコンポーネントの定義を含むファイルを作成する場合は、true に設定します。</p> <p>定義を含むファイルを作成しない場合は、false に設定します。</p> <p>この包括的なファイルを作成しないことを選択した場合でも、個々のコンポーネントの定義ファイルは repository ディレクトリーにコピーされます。</p>
-G replaceExistingResponse	<p>インストーラーによってコピーされているファイルと同じ名前を持つ、システム上で検出されたすべてのファイルを置き換える場合は、yesToAll または yes に設定します。</p> <p>インストーラーによってコピーされているファイルと同じ名前を持つ、システム上で検出されたいかなるファイルも置き換えない場合は、noToAll または no に設定します。</p>
-G replaceNewerResponses	<p>インストーラーによってコピーされているファイルより新しい、システム上で検出されたすべてのファイルを置き換える場合は、yesToAll または yes に設定します。</p> <p>インストーラーによってコピーされているファイルより新しい、システム上で検出されたいかなるファイルも置き換えない場合は、noToAll または no に設定します。</p>

表4. サイレント・インストールのオプション (続き)

オプション名	オプション値
-G createDirectoryResponse	<p>オプションで指定された製品ディレクトリーが存在しない場合に、そのディレクトリーを新たに作成する場合は、yes に設定します。</p> <p>製品ディレクトリーが存在しない場合に、そのディレクトリーを新たに作成しない場合は、no に設定します。</p> <p>指定されたディレクトリーが存在しない場合は、インストールが成功するためには、このオプションを yes に設定する必要があります。</p>
-G removeExistingResponse	<p>このオプションは、いかなるプラットフォーム上のいかなるブローカーにも関連しません。このオプションはコメント化してください。</p>
-G removeModifiedResponse	<p>このオプションは、いかなるプラットフォーム上のいかなるブローカーにも関連しません。このオプションはコメント化してください。</p>

応答ファイルのテンプレートのいずれかを変更し、それをサイレント・インストールに使用することができます。この場合、必要なオプションと矛盾する他のすべてのオプションは、先頭にハッシュ記号 # を置くことによってコメント化します。または、必要なオプションを含む新規の応答ファイルを作成することもできます。この方法では、応答ファイルを混乱させる不必要なオプションやコメント化された記述ブロックが存在せず、読みやすく、編集が容易になるので便利です。後者の方法を実行する場合、必要なオプションを新規ファイルに入力するよりも、テンプレート・ファイルをコピーして、不要なセクションやオプションを除去することをお勧めします。

サイレント・インストールの実行

サイレント・インストールを実行するには、コマンド行で、プラットフォーム固有のインストーラー実行可能ファイルをいくつかのオプション (作成した応答ファイル名を含む) と共に実行します。

以下に、Windows コンピューター上での実行例を示します。この例では、C:%data ディレクトリーにある、WAS および WMQI 統合ブローカー用の応答ファイルのテンプレートが使用されています。

```
D:%WebSphereBI>setupwin32.exe -silent -options
C:%data%settings_WBIAInstaller_WSMQ.txt
```

以下に、AIX コンピューター上での実行例を示します。この例では、/home/icsadmin ディレクトリーにあるカスタム応答ファイル install.txt が使用されています。

```
# ./setupAIX.bin -silent -options /home/icsadmin/install.txt
```

追加アダプターのインストール

追加アダプターをインストールするには、WBIA インストーラーをもう一度実行します。「コンポーネント選択」画面で、システムにすでにインストールされているすべてのコンポーネントの横には、(installed) という語が表示されます。

WBIA のディレクトリー、ファイル、および環境変数

インストーラーの実行中に行った選択に応じて、多数のディレクトリー、ファイル、および環境変数が作成されます。

WBIA のディレクトリーおよびファイル

インストールが完了すると、ファイル・システムおよびその内容を表示できます。表 5 に、認識しておく必要があるディレクトリーの一部をリストします。作成されるフォルダーやファイルは、インストール時の選択およびオペレーティング・システムによって異なります。

表 5. *WebSphere Business Integration Adapter* のディレクトリー

ディレクトリー名	内容
<code>_jvm231</code>	このディレクトリーには、Java ランタイム・ファイルが格納されます。 注: 以前のバージョンの WBIA からアップグレードする場合、そのリリースの既存のディレクトリー名が保持されます。
<code>_uninst_WBIA2.3.1</code>	このディレクトリーには、WebSphere Business Integration Adapters 製品のアンインストールに必要なファイルが格納されます。 WBIA のアンインストールの詳細については、21 ページの『WebSphere Business Integration Adapters のアンインストール』を参照してください。 注: 以前のバージョンの WBIA からアップグレードする場合、そのリリースの既存のディレクトリー名が保持されます。
<code>bin</code>	このディレクトリーには、ビジネス・インテグレーション・アダプターで使用される実行可能ファイルおよびシェル・スクリプトが格納されます。
<code>connectors</code>	このディレクトリーには、システム内の各アダプター固有のファイルが格納されます。また、アダプターがサポートするアプリケーションにインストールする必要があるアダプター固有のファイルも格納されます。
<code>DataHandlers</code>	このディレクトリーには、データ・ハンドラー用の <code>.jar</code> ファイルが格納されます。
<code>DevelopmentKits</code>	このディレクトリーには、コネクターの開発に必要なファイルが格納されます。
<code>legal</code>	このディレクトリーには、ライセンス・ファイルが格納されます。
<code>lib</code>	このディレクトリーには、システムの共用ライブラリーおよび <code>.jar</code> ファイルが格納されます。
<code>logs</code>	このディレクトリーには、ログ・ファイルとトレース・ファイルが格納されます。
<code>messages</code>	このディレクトリーには、コネクターによるログ・メッセージおよびトレース・メッセージの生成に必要なメッセージ・テキスト・ファイルが格納されます。

表 5. WebSphere Business Integration Adapter のディレクトリー (続き)

ディレクトリー名	内容
ODA	このディレクトリーには、各 Object Discovery Agent の .jar ファイルおよび .bat ファイルが格納されます。
repository	このディレクトリーには、コネクタ定義ファイルが格納されます。
templates	このディレクトリーには、WebSphere MQ キューの作成および消去に必要なサンプル・スクリプト・ファイルが格納されます。 ご使用の統合ブローカーが WebSphere MQ Integrator Broker または WebSphere Application Server である場合、これらのスクリプトの使用についてはブローカーのインプリメンテーション・ガイドを参照してください。 ご使用の統合ブローカーが WebSphere InterChange Server である場合、該当するプラットフォーム用の InterChange Server インストール・ガイドを参照してください。
Tools	このディレクトリーの下には WSWB203 ディレクトリーがあり、ここには WebSphere Studio Workbench のインストールが格納されます (ワークベンチをインストールすることを選択した場合)。

環境変数

ブローカーとして WebSphere MQ Integrator Broker または WebSphere Application Server を選択した場合、インストーラーは表 6 で説明するアクションを実行して、コンピューター上の環境変数を作成および更新します。統合ブローカーとして WebSphere InterChange Server を選択した場合、これらのアクションは実行されません。これは、このブローカーに必要な環境変数が、ブローカー自体のインストール時に作成されるためです。

表 6. 環境変数について インストーラーによって実行されるアクション

環境変数名	インストーラーのアクション
CROSSWORLDS	この環境変数を作成して、インストーラーの使用時に指定された WBIA 製品ディレクトリーを参照します。
MQ_LIB	この環境変数を作成して、インストーラーの使用時に指定された、WebSphere MQ インストール・ディレクトリー内の Java¥lib ディレクトリーへのパスを組み込みます。
CLASSPATH	以下のエントリーを追加します。 <i>ProductDir¥lib¥rt.jar;</i> <i>ProductDir¥DataHandlers¥CwDataHandler.jar;</i>
PATH	以下のエントリーを追加します。 <i>ProductDir¥bin¥hotspot;</i> <i>ProductDir¥bin¥classic;</i> <i>ProductDir¥bin;</i>

WebSphere Business Integration Adapters のアンインストール

WBIA または選択したアダプターのアンインストール方法は、製品のインストール方法によって異なります。

WBIA 製品を CD からインストールした場合は、『CD からインストールしたアダプターのアンインストール』の手順を実行します。

Electronic Software Delivery (ESD) を使用して WBIA 製品をインストールした場合は、24 ページの『ESD からインストールしたアダプターのアンインストール』に説明されている手順を実行します。

CD からインストールしたアダプターのアンインストール

CD からインストールしたアダプターをアンインストールする場合は、次の手順を実行します。

- 『グラフィカル WBIA アンインストーラーの起動』で説明されている方法でグラフィカル・アンインストーラーを起動し、アンインストール・ウィザードで、22 ページの『グラフィカル WBIA アンインストーラーの使用』の説明に従って選択を行います。
- 23 ページの『サイレント・モードのアンインストールの実行』で説明されている方法で、サイレント・モードのインストールを実行できます。

重要: WBIA アンインストーラーでは、ESD ダウンロードからインストールされたアダプターは除去されません。ESD ダウンロードからインストールされたアダプターの除去については、24 ページの『ESD からインストールしたアダプターのアンインストール』を参照してください。

グラフィカル WBIA アンインストーラーの起動: WBIA 製品がインストールされているプラットフォームに応じて、次のいずれかのセクションの手順に従い、アンインストーラーを起動します。

- 『Windows 環境でアンインストーラーを起動するには』
- 『UNIX 環境でアンインストーラーを起動するには』

Windows 環境でアンインストーラーを起動するには:

ProductDir/_uninst_WBIA2.3.1 ディレクトリーへ移動して、WBIA アンインストーラー、*uninstaller.exe* を実行します。

UNIX 環境でアンインストーラーを起動するには: *ProductDir/_uninst_WBIA2.3.1* ディレクトリーへ移動して、WBIA アンインストーラー、*uninstaller.bin* を実行します。

Common Desktop Environment を実行していて、UNIX コンピューターで直接作業している場合は、*uninstaller.bin* ファイルをダブルクリックできます。

X エミュレーション・ソフトウェアを使用して Windows コンピューターから UNIX コンピューターに接続している場合は、コマンド行で *uninstaller.bin* ファイルを実行する必要があります。例えば、次のようになります。

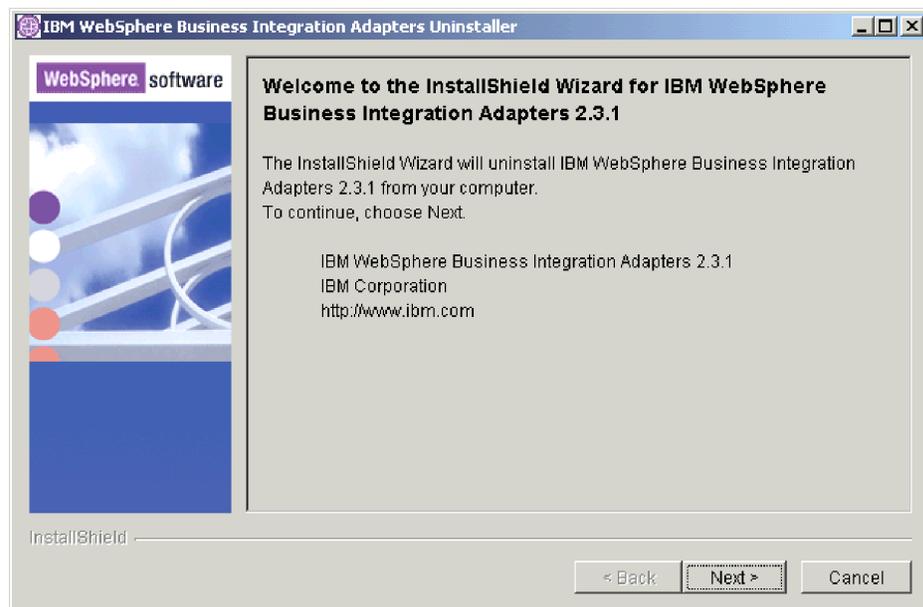
```
# ./uninstaller.bin
```

グラフィカル WBIA アンインストーラーの使用: WBIA アンインストーラーを使用して、次の手順でシステム全体または選択したコンポーネントをアンインストールします。

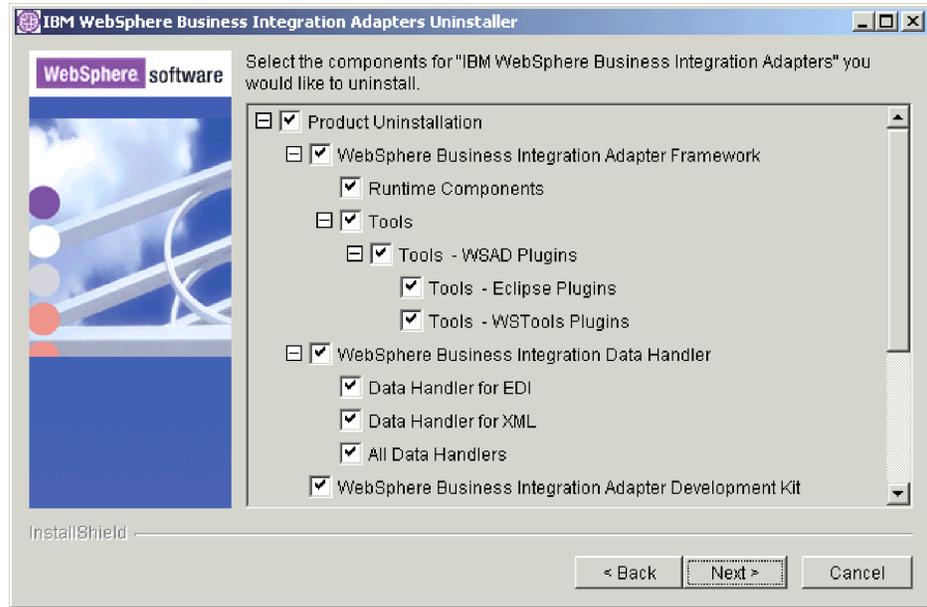
1. 言語選択のプロンプトが出されたら、ドロップダウン・メニューから任意の言語を選択し、「OK」をクリックします。



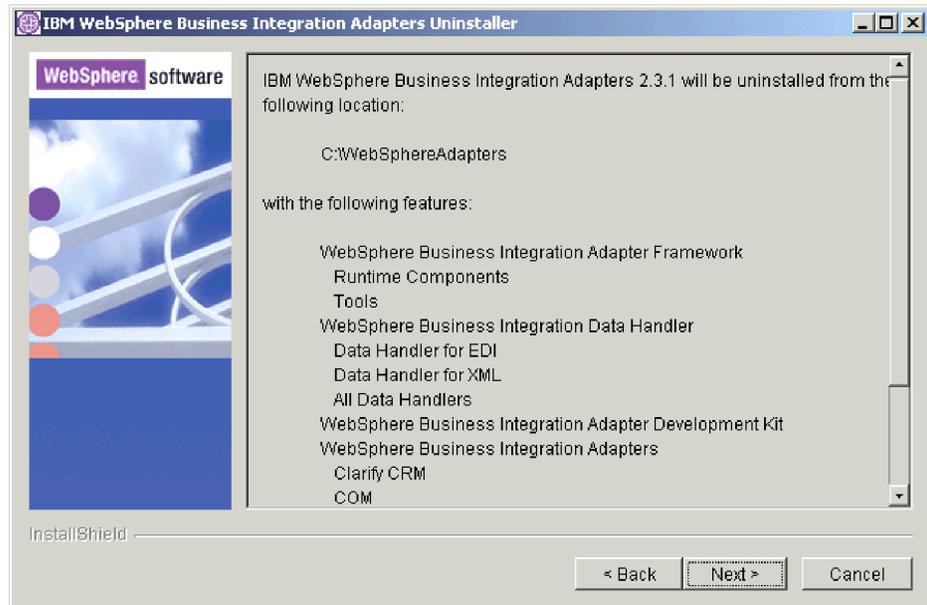
2. 初期画面で「次へ」をクリックします。



3. コンポーネントの選択画面で、アンインストールするコンポーネントの横にチェック・ボックスがあることを確認します。デフォルトでは、すべての WBIA 製品がアンインストールされるよう選択されます。アンインストールしたくないコンポーネントのチェック・ボックスをオフにしてから、「次へ」をクリックします。



4. 要約の画面に、アンインストールされるコンポーネントとそれらがインストールされていた製品ディレクトリーが示されます。情報を確認してから、「次へ」をクリックします。



5. アンインストーラーが正常に完了したら、「完了」をクリックします。

サイレント・モードのアンインストールの実行: サイレント・モードのアンインストールを実行するには、コマンド行で、`-silent` オプションを指定して、`ProductDir` にある `_uninst_WBIA2.3.1` ディレクトリーでプラットフォーム固有のアンインストーラー実行可能ファイルを実行します。

次の例は、WBIA 製品が `C:\WebSphereAdapters` にインストールされている場合に、Windows コンピューターでの実行方法を示しています。

```
C:%WebSphereAdapters¥_uninst_WBIA2.3.1>uninstaller.exe -silent
```

次の例は、AIX コンピューターでの実行方法を示しています。

```
# ./uninstaller.bin -silent
```

注: 以前のバージョンの WBIA からアップグレードした場合、ディレクトリー `_uninst_WBIA2.3.1` は作成されません。以前の `_uninst_WBIA2.x.x` アンインストーラー・ディレクトリーが保持されますが、アップグレードされた内容が格納されます。

注: サイレント・モードのアンインストールでは、ESD からインストールされたアダプターはアンインストールされません。ESD からインストールされたアダプターのアンインストール方法については、『ESD からインストールしたアダプターのアンインストール』を参照してください。

ESD からインストールしたアダプターのアンインストール

Electronic Software Delivery (ESD) を使用して WebSphere Business Integration Adapters アダプターをインストールした場合、アンインストーラーは `_uninstXXX` というディレクトリーにあります。ここで、`XXX` は、アンインストールされるアダプターです。例えば、WBIA Adapter for JMS のアンインストーラーは、`_uninstJMS` ディレクトリーにあります。ESD を使用してダウンロードしたアダプターをアンインストールするには、次の手順を実行します。

1. コマンド行から、該当するアンインストール・ディレクトリーに移動します。
2. アダプターのアンインストーラーを起動するには、次のコマンドを実行します。

```
java -cp uninstall.jar run
```

注: このコマンドを実行するには、Java ランタイム環境がインストールされている必要があります。

重要: WebSphere Business Integration Adapters 製品全体をアンインストールするには、`ProductDir/_uninst_WBIA2.3.1` に移動し、Windows の場合は `Uninstaller.exe`、Unix の場合は `uninstaller.bin` という WBIA アンインストーラーを実行します。

特記事項

本書に記載の製品、サービス、または機能が日本においては提供されていない場合があります。日本で利用可能な製品、サービス、および機能については、日本 IBM の営業担当員にお尋ねください。本書で IBM 製品、プログラム、またはサービスに言及していても、その IBM 製品、プログラム、またはサービスのみが使用可能であることを意味するものではありません。これらに代えて、IBM の知的所有権を侵害することのない、機能的に同等の製品、プログラム、またはサービスを使用することができます。ただし、IBM 以外の製品とプログラムの操作またはサービスの評価および検証は、お客様の責任で行っていただきます。

IBM は、本書に記載されている内容に関して特許権 (特許出願中のものを含む) を保有している場合があります。本書の提供は、お客様にこれらの特許権について実施権を許諾することを意味するものではありません。実施権についてのお問い合わせは、書面にて下記宛先にお送りください。

〒106-0032
東京都港区六本木 3-2-31
IBM World Trade Asia Corporation
Licensing

以下の保証は、国または地域の法律に沿わない場合は、適用されません。

IBM およびその直接または間接の子会社は、本書を特定物として現存するままの状態を提供し、商品性の保証、特定目的適合性の保証および法律上の瑕疵担保責任を含むすべての明示もしくは黙示の保証責任を負わないものとします。国または地域によっては、法律の強行規定により、保証責任の制限が禁じられる場合、強行規定の制限を受けるものとします。

この情報には、技術的に不適切な記述や誤植を含む場合があります。本書は定期的に見直され、必要な変更は本書の次版に組み込まれます。IBM は予告なしに、随時、この文書に記載されている製品またはプログラムに対して、改良または変更を行うことがあります。

本書において IBM 以外の Web サイトに言及している場合がありますが、便宜のため記載しただけであり、決してそれらの Web サイトを推奨するものではありません。それらの Web サイトにある資料は、この IBM 製品の資料の一部ではありません。それらの Web サイトは、お客様の責任でご使用ください。

IBM は、お客様が提供するいかなる情報も、お客様に対してなんら義務も負うことのない、自ら適切と信ずる方法で、使用もしくは配布することができるものとします。

本プログラムのライセンス保持者で、(i) 独自に作成したプログラムとその他のプログラム (本プログラムを含む) との間での情報交換、および (ii) 交換された情報の相互利用を可能にすることを目的として、本プログラムに関する情報を必要とする方は、下記に連絡してください。

IBM Burlingame Laboratory Director
IBM Burlingame Laboratory
577 Airport Blvd., Suite 800
Burlingame, CA 94010
U.S.A

本プログラムに関する上記の情報は、適切な使用条件の下で使用することができませんが、有償の場合もあります。

本書で説明されているライセンス・プログラムまたはその他のライセンス資料は、IBM 所定のプログラム契約の契約条項、IBM プログラムのご使用条件、またはそれと同等の条項に基づいて、IBM より提供されます。

この文書に含まれるいかなるパフォーマンス・データも、管理環境下で決定されたものです。そのため、他の操作環境で得られた結果は、異なる可能性があります。一部の測定が、開発レベルのシステムで行われた可能性がありますが、その測定値が、一般に利用可能なシステムのものと同じである保証はありません。さらに、一部の測定値が、推定値である可能性があります。実際の結果は、異なる可能性があります。お客様は、お客様の特定の環境に適したデータを確かめる必要があります。

IBM 以外の製品に関する情報は、その製品の供給者、出版物、もしくはその他の公に利用可能なソースから入手したものです。IBM は、それらの製品のテストは行っておりません。したがって、他社製品に関する実行性、互換性、またはその他の要求については確証できません。IBM 以外の製品の性能に関する質問は、それらの製品の供給者をお願いします。

本書には、日常の業務処理で用いられるデータや報告書の例が含まれています。より具体性を与えるために、それらの例には、個人、企業、ブランド、あるいは製品などの名前が含まれている場合があります。これらの名称はすべて架空のものであり、名称や住所が類似する企業が実在しているとしても、それは偶然にすぎません。

IBM の将来の方向または意向に関する記述については、予告なしに変更または撤回される場合があります、単に目標を示しているものです。

プログラミング・インターフェース情報

プログラミング・インターフェース情報は、プログラムを使用してアプリケーション・ソフトウェアを作成する際に役立ちます。

一般使用プログラミング・インターフェースにより、お客様はこのプログラム・ツール・サービスを含むアプリケーション・ソフトウェアを書くことができます。

ただし、この情報には、診断、修正、および調整情報が含まれている場合があります。診断、修正、調整情報は、お客様のアプリケーション・ソフトウェアのデバッグ支援のために提供されています。

警告: 診断、修正、調整情報は、変更される場合がありますので、プログラミング・インターフェースとしては使用しないでください。

商標

以下は、IBM Corporation の商標です。

IBM
IBM ロゴ
AIX
CrossWorlds
DB2
DB2 Universal Database
Domino
Lotus
Lotus Notes
MQIntegrator
MQSeries
Tivoli
WebSphere

Microsoft、Windows、Windows NT および Windows ロゴは、Microsoft Corporation の米国およびその他の国における商標です。

MMX、Pentium および ProShare は、Intel Corporation の米国およびその他の国における商標です。

Java およびすべての Java 関連の商標およびロゴは、Sun Microsystems, Inc. の米国およびその他の国における商標または登録商標です。

他の会社名、製品名およびサービス名などはそれぞれ各社の商標または登録商標です。

System Manager およびその他のパースペクティブには、Eclipse Project (<http://www.eclipse.org/>) により開発されたソフトウェアが含まれています。

IBM WebSphere InterChange Server V4.2.1、IBM WebSphere Business Integration Toolset V4.2.1、IBM WebSphere Business Integration Adapters、V2.3.1





Printed in Japan